

オプションの利用とポンド

個人トレーダーがゲームストップ株をはじめ、いくつかの個別株の市場から銀の市場へと価格上昇旋風を巻き起こしながら移っていく様は、ヘッジファンドが90年代に欧州、中南米、アジア、ロシアと通貨売りの旋風を巻き起こしながら市場を移っていったことを想起させる。もっともスケールや市場や社会への影響力の点では間違いだが。

個人トレーダーはヘッジファンドのショートポジションを標的にショートスクイーズ(ショートポジションの締め上げ)で成功した。だがこの戦略はヘッジファンドが締め上げられポジションを閉めた後は、自分たちのロングポジションが標的に晒される運命をはらむ。

銀の市場では先物市場でショートポジションが膨れ上がっていると判断したが、実はそのショートの多くが現物のヘッジポジションであった。つまり純粋の投機ポジションではなかったため、自分たちの買いポジションが投機ポジションになりロングのスクイーズに晒された。急上昇した銀は翌日に急落した。

投機でいつも勝つのは個人でもヘッジファンドでも難しい。だが個人トレーダーがSNSでの情報交換やオプションを使ってヘッジファンドを凌駕したことは市場参加者としての個人の力を新たに認識させた。

今回の相場上昇の原動力の一つだったコールオプションの買いは、為替市場でもポピュラーな商品だ。最近ではBREXITを巡るポンドの市場での利用が目立った。この時は買う権利のコールも売る権利のプットもポジションが積みあがった。BREXITの合意ありかなしかにより大きな相場変動が見込まれたからだ。その時のレートからかけ離れたレートをオプションの行使価格に設定しても利益が出る可能性が高かった。オプション料は行使価格が離れば離れるほど安くなる。それにオプションの買いの場合、最大損失がオプション料に限定されるのも利点だ。現物の場合変動の激しい市場ではストップロスが注文通り実行されるかは不確かだからだ。

BREXIT騒動はとりあえず年末に終息したが、その後のポンドは変動率が低下し穏やかな動きになっている。

ポンドドルは年初1.36水準だったが、直近もほぼ同水準で推移している。その間1.34台から1.37台の変動幅だ。ポンドは堅調と言える。BREXIT後の為替変動要因としてパンデミックと金融政策がある。

今週はBOE(英国中央銀行)の金融政策委員会が開かれる。現行の政策金利は0.1%だが、金融政策の変更はないとの見方が市場では支配的だ。その点ではポンドの大きな変動も見込まれない。

ただ英国はコロナウイルス感染者数も多く、ロックダウンも長期化しそうだ。景気の二番底の可能性もあり、利下げの可能性を指摘する声も一部ではある。そうなればポンドは売られる。このシナリオはワクチン接種の普及のスピードにより左右される。

欧州通貨危機の時、ヘッジファンドや金融機関はポンドを継続的に売った。SNSはなかったがロイターや電話で互いに連絡を取りあい情報交換した。締め上げる相手はBOEだ。ポンドを買い支えていたが最後に白旗を上げた。

現在のポンドの市場では個人トレーダーが標的にするようなポジションを大きく傾けている市場参加者はいない。例えいたとしてもゲームストップ株のようなわけにはいかない。市場規模が違うからだ。